

## 温故知新

### Developing New Ideas Based on Learning from the Past

神谷 是行\*1

Yoshiyuki Kamiya

2015年10月, 建築設備工学科OBを中心とする350名を超える設備関係者により, 建築設備工学科創立50周年記念式典が開催された。その後, 多くの参加者からの要望により, OB会員以外にも建築・設備・環境にかかわる技術者が集うことのできる新たな会として, 「建築・環境設備友の会」が結成され, 毎年会することが約された。今年も10月31日に第2回「建築・環境設備友の会」が200名を超える参加をもって盛大に開催された。これは, 大澤一郎が関東学院に蒔いた「設備教育の種」が, 建築設備工学科へと育ち, 50年を経て世の中で大樹へと成長した証であろう。

「建築機械設備」なる語をこの世に広めた大澤一郎を直に知る現役教員はすでに存在せず, この2018年は大沢記念建築設備工学研究所開所50周年に当たる。そこで, 現在の研究所の役割を再確認するために, 「大澤一郎先生生誕100年記念誌“橄欖の若葉かざして”」を読み返してみた。

#### 1) 戦前の大澤

大澤は, 1910年に早稲田大学の高等予科に入学し, 翌1911年に建築学科(2回生)に進学した。大澤は非常に行動的で, 1年時には満鮮実習見学旅行を計画し, 本土では見られない暖房設備工事の助手を体験した。さらに2年時には, 台湾旅行に出かけ, 病院の建築現場を体験して, 水道と下水道の実際を見学した。後に大澤は, 「筆者にとってこの旅行は, その後50年あまりの”建築設備工学“のために費やすに至った分岐路と考えても間違いではない。」と記している。若い時代の多くの体験が, いかにもその人間を大きく育てるかを物語っている。

1914年の建築学科卒業時, 大澤は卒業生総代として答辞を述べ, 「大隈綾子賞」を受賞している。当時の私立大学は, 世間から見れば大学とは名ばかりで, 卒業しても高等工業以下の待遇であったという。冷暖房に深い興味をもっていた大澤は, 機械・電気を勉強せよとの助言により, 機械工学科2年に編入した。秀才であったことには変わりないが, 時代を読み, このとき下した的確な判断が, 我が国の「設備

工学の礎」につながっていく。

機械工学科卒業後, 建築学科の助教授として教壇に立ち, 機械・電気設備と衛生設備の講義をまとめた「建築機械設備」なる科目で授業を講義することとなる。また, 大澤は, 大学の営繕関係の仕事をしてきたこともあって, 大隈重信やその周辺の推薦により, 帝大卒の先輩に先んじて, 1920年にイリノイ大学大学院に2年間留学している。しかし, これがその後の大澤の立場を微妙なものにし, 後に早稲田を去ることにつながるが, 多くを語ってはいない。

イリノイ大では主に機械・電気の授業に出席したようであるが, 内容的にはあまり得られるものはないとのことで, もっぱら当時の設備技術及び設備教育に関する情報集めと見学旅行で見聞を広めたようである。大澤の言う「実際は理論に先立つ」は, このとき体験から発せられたものであろう。帰国後は, 得られた知見を基に本格的な設備教育を開始し, 終戦の1945年まで, 現芝浦工大, 日大で設備教育に当たっている。

#### 2) 関東学院と大澤

大澤と関東学院の接点は, 戦後の就職難といわれている。当時の関東学院は専門学校の時代で, 機械系の就職が悪く建築系の就職が良かった。そこで, 機械系の卒業生を建築設備界に就職させようとの目論見から, 大澤に白羽の矢が立てられ, 1946年から機械科で空調設備の授業が開講された。このときが, まさに「関東のセツビ」の種がまかれた瞬間であった。この授業を受けた学生全員が卒業後一流設計会社, ゼネコン, 施工会社に進み, 将来大いに活躍することになる。

1949年の学制改革により専門学校が大学に昇格するのを機に, 大澤を学科長として工学部建築学科が誕生し, 以降, 設備に重点を置いた教育が実践される。大澤が50年間追い続けた「設備工学教育のあるべき姿」の集大成として, 1965年わが国初の設備工学専門学科である「建築設備工学科」が建築学科から分離独立し, さらに1967年, 「関東学院大学建築設備工学研究所」が開設された。

建築設備工学研究所は, その設立に向けた募金活動が1963年から開始され, 神奈川県, 横浜市, ゼネコン, 設備施工会社, 早大卒業生並びに大澤家から

\*1 所員 理工学科

Dept. of Science and Engineering, Kanto Gakuin Univ.

の寄付金により建設された。当時の研究所設立書趣意書には、事業内容として、「建築設備工学の試験・研究, 実験(学外研究者の参加を歓迎する)」とある。建物は、当時の関東学院としては珍しい鉄筋コンクリート4階建てで、先端の設備を備え、建物自体が実験装置となるよう計画されていた。

独立学科として教育・研究を行う上で、教員の研究室と実験室は必要不可欠のスペースである。しかし、学科開設当初の学科スペースは50m<sup>2</sup>程度の1室のみで、教員の研究室はおろか実験室もない状態であった。大澤は、この大問題の打開策としても、研究所の設立を計画したものと推察できる。これにより研究所内に教員の研究室・実験室が確保されたと聞く。その後大澤は体調を崩し、残念ながら研究所を利用することはなかったようであるが、まさに、設備教育の理想を追求した半生は、後輩・学生のた

めに捧げられたとものであった。そこで、この功績に対して大澤の名を冠し、当研究所は正式に“関東学院大学大沢記念建築設備工学研究所”となった。

思うに、これまでの設備工学研究所は、大澤の意図した構想のもとに運営され、設立以来50年が経過した。しかし、我が国の置かれている社会的・経済的環境は大澤の時代のそれとは大きく変化し、特に大学を取り巻く環境は一変したと言っても過言ではない。研究所の建物自体も改修され、学科も「建築設備工学科」から「建築学科」を経て、「建築・環境学科」へと変わった。しかし、「関東のセツビ」には「大澤の設備工学・教育に対する精神」が脈々と引き継がれている。今後、我々はそれを継承しつつ、大学付置研究所としてどう発展させていくかが今問われている。